

平成22年度 評価書(牧田小学校)

【別紙1-2】

鈴鹿市立牧田小学校						
評価項目	本年度の活動(具体的な手立て)と指標	達成状況	成果と課題	学校関係者評価	今後の改善点	
学力保障	授業改革 授業研究	①教科研究。(研究主題:意欲的に学び、生きる力を身につけていく子どもひとりひとりの学力保障を目指して(算数科・日本語指導) ・算数科の授業研究を各学年で実施し、3つの手立てを基に指導の工夫・改善。 ・日本語指導通級教室(いきいき教室)との連携 【3つの手立て】・わかりやすい授業をつくる。・視点児童を単元の中に位置づける。・支援シートを作成する。 ②3学期に4・5・6年生で算数科CRT学力検査の実施 ・CRT結果全国比95以上をめざす。	①1学期に、4年、いきいき教室で実施、2学期には研究発表会で全学級を公開した。 ②1月下旬～2月上旬にかけて、4・6年生の算数科で実施した。5年生については学力フォローアップ事業で国・算の2教科を実施。 ③4年96・5年92・6年91	【成果】①・わかりやすい授業づくりに取り組むことで算数が苦手な児童が減少傾向にある。・視点児童の位置づけることで、視点児童だけでなく算数に苦手意識をもっている児童が授業に参加しやすくなった。・支援シートを作成することによって視点児童の実態を把握し、個に応じた指導ができた。 ・各学年の状況に応じた授業形態が設定された。 ②子どもの学力の実態を分析・把握することができた。 本校の取組の達成状況を分析・把握することができた。 【課題】①単元の学習を始める前のつまずきを克服させたい。 ・児童が解いてみたくなる課題の研究を続けたい。・教材・教具の開発や操作活動を充実させたい。・いきいき教室との連携をよりういっそう図っていききたい。・反復練習の機会を確保したい。 ②強み弱みを分析し、次年度への指導強化につなげていきたい。 各学年、前年より向上し底上げができた。	・教員同士で効果的な授業の研究を進める取組は高く評価できる。今後とも教員同士で連携を図り、相互にサポートしつつ分かりやすい授業づくりの向上をめざして取り組んでほしい。 ・基礎学力の定着をめざして研修を進めていってほしい。計算は、繰り返し練習して身につけさせたい。	①単元の系統を週り、つまずきを克服しておく。そのための指導時間を確保したり、ステップ学習用プリントを有効活用したりする。 ・全ての子どもが理解しやすい教材・教具を用い、わかりやすい授業づくりをする。子どもの思考過程に沿った操作活動を創造する。 ・JSLバンドスケールで日本語能力を判定し、外国人児童に応じた算数科での支援のあり方を研究する。 ・分析方法を検討し、それをもとにしてひとりひとりの学力保障につなげたい。
	少人数指導	①独自学級をつくり、少人数学習実施。 ②習熟度別学習	①3・5・6年 ②5年生の算数科で実施した。	【成果】①②学力保障が必要な児童へのきめ細やかな支援ができた。②ひとりひとりの学習状況を把握しきめこまやかな指導ができた。 【課題】①指導者の配当が工夫できず、5年生以外の学年では、習熟度別学習が充分にできなかったのより工夫したい。 ②全3学級なので4教室にしようとするが教室が足りない。	・独自学級ならではの難しさがあると思う。児童一人ひとりにあった教育を今後も進めてもらいたい。 ・他校での先進事例に学ぶことも大切である。真似るのが一番の早道。 ・今後とも授業研究を促進させてください。	①②指導者の配当の工夫・学習形態や個別の支援ばかりに頼らない指導法を研究し、分かりやすい教材を開発する。 ・学習支援ボランティアの有効な活用を行う。
	学習ボランティア活用	①算数科の授業と課題別学習「ステップ学習」でボランティアを活用 ②読書の時間に読み聞かせボランティアを活用 ③地域コーディネーターを活用 ④スクールサポート会議を年2回開催	①1～6年で実施した。 ②1～6年で実施した。 ③2名配置 ④年2回実施し、地域コーディネーターが地域の代表者に取組内容などを報告した。	【成果】①つまずきのある児童へのきめ細やかな支援ができた。 ②子どもが楽しみにしていた。③学習支援ボランティア31名活用した。 【課題】①学習支援ボランティアのより有効な活用方法を研究する。 ④④牧田地区地域づくり協議会との連携を図りたい。	・ボランティアの方の支援でつまずきのある児童には効果をあげている。 ・学習支援の場がボランティア参加者の学びにもつながるとよいと思う。そのことがボランティアの深化とすそ野づくりに役立つと思う。	①指導者と学習ボランティアとの連絡を工夫し、打ち合わせの時間を確保したい。 ・学習支援ボランティアの支援方法の研究を行う。 ②地域コーディネーターの活用を深める。 ③読み聞かせボランティアを増員したい。 ④牧田地区地域づくり協議会の学校支援体制を確立する。
	補充学習	①毎朝、15分間のチャレンジタイムを校時に位置づけ、計算、漢字、読書などの学習の実施 ②夏休みに3年生では補習授業、4・5・6年生ではステップ学習(課題別学習)の実施 ③金曜日6日目に、4・5・6年生でステップ学習(課題別学習)の実施	①1年を通して、毎朝、1限目の前に実施した。(主に国語・算数の補充・読書) ②夏休み前半にステップ学習を実施した。課題をもつ児童が参加した。3日間ほとんどどの児童が課題を克服した。 ③1学期に2回、2学期に3回、3学期に3回実施した。	【成果】①・学習意欲の高まりや基礎的な学力の定着が見られた。15分にし、教師がつくことで効果があがった。1限目開始前に落ち着いた学習の体制が整えられた。 ②1学期のつまずきが克服され、自信につながった。③自分のペースで学習が進められたので、つまずきの克服が進んだ。 【課題】①各学年の内容について検討が必要である。 ②本当に学力補充が必要な児童が参加していない。 ③つまずきをなかなか克服できず、上の課題に進めない児童がいる。	・補充学習は子どもたちのために今後も継続してほしい。学ぶこと・わかることの楽しさを児童に個別に伝えるよい機会になっていると思う。 ・夏休みに実施することは有効である。	①学年に応じた学習内容を精選し、実施方法の研究を行う。 ②参加しない児童へのはたらきかけを強化し、保護者への説明と参加協力を要請する。学習しやすいような学習環境を整える。 ③学習ボランティアの協力や教室配置についてしっかりと検討し、効率よく支援と採点ができるようにする。
	キャリア教育(すずか夢工房・職業体験学習)	①4年生が地域ボランティアの先駆者「前川定五郎」のことを知り、その苦労や思いにふれる。 ②各学年1回以上、すずか夢工房の達人に学ぶ。	①担任が総合の時間に「定五郎物語」を読み聞かせた。 ②3年生で実施した。	【成果】①②子どもたちは、定五郎さんと達人の生き方に感動し、夢と希望をもつ大切さを学習できた。 【課題】②申し込んでも調整がつかず実施できなかった。	・世の中の各現場で活躍されている方の生の声を児童に届ける取組は今後も実施してほしい。達人の経験を学ぶことは大切である。	①パソコンを使った教材づくりや現地学習に取り組みたい。 ②どの学年も各分野の達人から生き方や考え方を学ばせたい。
	日本語指導	①教材づくり ②児童の日本語力チェック(JSLバンドスケールの活用) ③JSLバンドスケール年2回実施 ④バンドスケール研修会	①ルビ付き教科書コピー・全文リライト・要約リライト等レベルに合わせた補助プリントなどをつくった。 ②各学期末にJSLバンドスケール測定と学年別検討会を実施した。 ③外国人児童全員に実施した。 ④夏休み・12月・3月に全体研修会を実施した。	【成果】①②在籍学級での学習に意欲的に取り組むようになった。 ・リライト教材、補助プリントを作成して指導したので、児童の理解が深まり、日本語が分かるようになってきた。 ・在籍学級に戻る児童が増えてきた。 ③子ども一人ひとりの日本語力を知ることができ、個に応じた指導ができた。 ④職員全体に共通理解が図られた。 【課題】①②1・2・3年生の一斉取り出しの工夫の必要がある。担当者・指導助手が足りない。 ③初期適応指導に必要な児童の支援方法の検討。学力保障のためにバンドスケールを活用したい。 ④支援シートを継続的に活用したい。しかし、在籍学級担任といいきいき教室担当者の連携する時間をとるのが難しい。	・教材づくり、指導の工夫等、教員全体でのきめ細かい取組がよくわかる。(特に、高学年で編入してくる児童) ・外国人児童への教育内容・事例は積極的に広報してほしい。地域からの協力の声が出るのではと思う。	①②初期適応指導に必要な児童のための教材づくりが必要である。(特に、高学年で編入してくる児童) ③バンドスケールの研修をさらに進めたい。 ④算数科での日本語指導にさらに取り組みたい。

	<p>通級指導</p>	<p>①通級指導による個別支援 ②保護者との連携 ③教育研究所との連携</p>	<p>①6名の児童に通級指導を行った。 ②保護者との話し合いの機会を持った。就学相談を実施した。 ③特別支援コーディネーターが教育研究所との連携を持った。</p>	<p>【成果】①②発達障がいのある子どもへの支援方法について、学期毎に評価し、次の学期(次年度)への取組に生かすことができるよう、家庭、在籍校のコーディネーター、担任と話し合いの機会を設けた。それぞれの役割を確認するとともに、子どもの「困り感」に即した支援方法の改善を図っていくことができた。 ③教育研究所と連携し、発達検査を行い、子どもの支援方法を協働して考えて実施した。 【課題】①発達障がいのある子どもたちの人数が多く、一人ひとりに支援していく時間が足りない。 ②一人ひとりへの支援に時間がかかり、保護者との連携を取る時間がとれない。 ③在籍校や教育研究所との連携を密にしていける必要があるが、子どもたちへの支援の時間が増加しているため、十分な時間が取れない。</p>	<p>・発達障がいのある児童に対して、他の児童が偏見をもたないようにするのが大切である。また、専門の知識のある教員や専門機関と連携して支援を進めることが大切である。</p>	<p>①様々な知識を得たり、事例検討を含めた研修に参加する機会と、個々に応じた教材教具の開発や作成する時間の確保が必要である。 ②③複数の児童を見ていく体制づくりを拡大していく必要がある。 ④スクールカウンセラー・心の相談員との連携をとる時間を取りたい。担当者が継続して支援できるように時間を増やして欲しい。</p>
	<p>生徒指導</p>	<p>①基本的な生活習慣の重視(保健指導を中心に) ・ほげんだよりを月1回以上発行 ・ハンカチ、つめ検査を毎週1回実施 ・毎朝の朝ご飯調べ ②安全で健康な校内生活を送るための活動(生活委員会の活動) ・「あいさつ運動」、「廊下は静かに歩く」、「チャイムを守るう」等の月目標設定。 ③自分を守る訓練等の実施 ・毎学期避難訓練(火災・地震) ・年1回以上不審者対応訓練 ・年1回以上交通安全教室 ・登下校の様子連絡と毎日の集団下校の実施 ④いじめをなくす取組 ・年2回実態調査アンケート ・取組検討、継続観察 ⑤事件事故対応 ・対応マニュアル作成と実行</p>	<p>①ほげんだより「げんき」月1回以上の発行した。ハンカチ・つめ検査毎週1回実施した。 ②あいさつ運動、月目標の達成のための見回り実施する等、生活実行委員会を中心に児童の主体的な活動を実施した。 ③毎学期、避難訓練。年1回の全校不審者対応訓練。全校児童対象の交通安全教室を実施した。 ④年2回のいじめ実態把握についてのアンケートを実施した。 ⑤対応マニュアル作成と検討を実施した。</p>	<p>【成果】 ①校内でできる取組(歯みがき指導・つめ・ハンカチ検査)については一定の成果がみられた。ハンカチ、つめ検査90%以上が合格であった。 ②生活委員会が主体的に取り組み、意識が高まった。 ③避難訓練、不審者対応訓練、交通安全教室等、児童の意識を高める内容で実施できた。 ④早めの実態をつかみ、対応、指導が実施できた。 ⑤対応マニュアルにより、事故対応の意思統一ができた。 【課題】 ①朝ご飯を食べる習慣や、睡眠時間を十分取る等の規則正しい生活を送ることに関して、家庭との連携を進める方策の検討が必要。 ②児童の活動と学級指導との連携を図っていく必要がある。 ③訓練の内容を普段の生活に生かされるように指導したい。 ④継続的に指導内容の検討に努めたい。</p>	<p>・子どもに正しい生活習慣を身につけさせるのは家庭の責任と思うが、生徒指導の一環として生活習慣を重視することはありがたいことだと受け止めている。「早寝、早起き、朝ごはん」については、保護者に実態調査を依頼する中で重要性を認識してもらった方法もある。</p>	<p>①取り組んだ内容は、家庭との連携を意識し、継続的に取り組めるように努める。 ②校内生活の基本的なルールを守るように、学級指導と連携し日常生活に関する指導を充実する。 ③訓練は継続的に実施し、内容に変化をつけながら、意識が高まるものにしていく。 ④生活の様々な場で児童の実態把握に努めるとともに、教員間の情報交換体制の充実を図る。また、成果と課題を継続的に検証し指導内容の確認ができる場を設定する。 ⑤事故対応マニュアルを活用するとともに、様々な事態に対し、状況に応じた連携体制がとれるように、連絡を密に取り合いながら、職員間で対応方法を確認していく。</p>
	<p>人権教育</p>	<p>①仲間づくりの推進 ②人権学習の推進 ③多文化共生の取組 ・全学年1回人権授業の実施 ・牧田万博を2月に実施 ④子ども理解会議・校内委員会を月1回実施</p>	<p>①実践交流会(年2回)を実施した。 ②授業実践の取組と人権フォーラムへに参加した。 ③授業参観で人権授業を実施した。牧田万博では50名のゲストティチャーに協力を得ることができた。 ④月1回実施した他に、校内委員会を随時実施した。</p>	<p>【成果】①実践交流会を持つことにより実態把握ができた。各学級で仲間づくりについての目標を決め、取り組むことができた。 ②授業実践を通し、ちがいを認め合う、仲間づくりができた。全体授業を実施し、創徳中校区で公開した。 ・人権フォーラムに参加することにより、多文化共生意識を高めることができた。 ③保護者に国際理解教育の取組を啓発できた。 ・牧田万博で国際理解を深めることができた。 (参加者は、一般94名、学校関係者10名) ④困り感をもつ児童について全職員の間で共通理解を図ることができた。専門機関の講師に支援方法について指導してもらった。 【課題】①児童の様子を理解するために、十分な話し合いが必要である。 ②仲間づくりの意識を高めるために、各学級の実態に合わせた公開授業が必要である。また、外国人差別に対する取組に重点が置かれていて、他の様々な差別への取組や共通認識が十分ではなかった。 ③国際理解の観点から、さらに進んだ多文化共生の取組を充実させたい。 ④より児童に寄り添った指導ができる話し合いを充実させたい。</p>	<p>・人権感覚や人権問題について地道な取組を継続的に進めてもらいたい。誰でも障がい者やマイノリティになる可能性がある。人権侵害や差別を自分の問題として受け取ることが重要である。</p>	<p>①実践交流会の有意義な運営方法を考えたい。 ②話し合いの場を増やし、共通理解を図る。 ③多文化共生の取組を充実する。(牧田地区地域づくり協議会との連携) ④専門的な機関と連携を図り、焦点を絞って検討したい。</p>
	<p>保護者・地域との連携</p>	<p>①「ここにこ牧田っ子見守り隊」の組織強化 ・学期末に情報交換と一斉下校時付き添いの実施 ・タスキの着用 ②学校たよりの地域回覧(毎月1回) ③牧田地区地域づくり協議会との連携</p>	<p>①登下校の子どもの見守り活動を実施した。また、学期末に情報交換会と一斉下校時付き添いを実施した。見守り隊員はタスキを着用した。 ②毎月発行できなかった。 ③校長・PTA会長・地域コーディネーターが委員として参加した。</p>	<p>【成果】①児童の様子やボランティアの方とのつながりがわかる見守り活動が実施できた。タスキを着用することで組織力を高め、不審者への抑止力となっている。 ②学校行事を地域に知らせることができた。 ③研究会に参加協力してもらい学校の様子を理解してもらった。 【課題】①緊急時の連絡体制づくりが必要である。 ②広報回覧との時間的なズレが生じ、タイムリーに回覧することが難しい。 ③よりよい連携の方法を考えたい。</p>	<p>・見守り隊にたくさんの人が協力してもらい安心して登下校できている。登下校の見守り活動は、学校・地域・保護者の協力なくしては効果的な活動が行えない。学校としてはよく対応してくれているが、保護者の一層の活動が必要と感じる。</p>	<p>①学校・家庭・地域で協力していただける方の輪を広げていく。 ・情報ネットワークの整備を進め、情報の共有を図る。 ・市内の先進的な取組に学び、より充実した活動を進める。・学校行事に招待して児童との触れ合いの場を多くしたい。 ②よりタイムリーな内容で発行できる工夫をする。 ③効果的な連携を考え、できることは学校も取り組んでいきたい。</p>